研究区分	教員特別研究推進　教育推進

研　究 テーマ	介護福祉士のポジショニングスキル熟達過程の経験に関する研究				
研究組織	代　表　者	所属・職名	短期大学部社会福祉学科・准教授	氏名	木林　身江子
	研究分担者	所属・職名	経営情報学部・講師	氏名	天野　ゆかり
		所属・職名	短期大学部社会福祉学科・非常勤講師	氏名	秋山　みゆき
	発　表　者	所属・職名	短期大学部社会福祉学科・准教授	氏名	木林　身江子

講演題目

生活支援記録法（F－SOAIP）を活用したポジショニング実践過程の記録からの検討

研究の目的、成果及び今後の展望

【研究の目的】

介護福祉士のポジショニングスキルの習得は、現場での実践経験の積み重ねが不可欠である。しかし、介護福祉士養成教育や初任者・実務者研修等においてもポジショニングの学習機会は殆どないことから、介護福祉士ら介護職員の個々の知識・技術にはばらつきがあり、専門的技術として熟達するためのプロセスは確立していないのが現状である。そこで、ポジショニング熟達のための一つのツールとして、生活支援記録法（F－SOAIP）を活用することでその実践過程および記録による効果を明らかにし、ポジショニング教育方法を検討するための基礎資料とする。

【成果】

A特別養護老人ホームの介護福祉士８名を対象に、生活支援記録法（F－SOAIP）について学習会を開催し、その後、ポジショニング実践場面を記録してもらった。実践記録から、介護福祉士がポジショニングを行う際の思考過程と介入状況、それに対する利用者の反応・変化等の内容を分析した。

F（着眼点）：着眼点を適切なタイトルとして明記できていない記録が多い。

S（主観的情報）：適切に記述できていた。

O（客観的情報）：利用者の身体の位置関係とポジショニングの状態の観察は概ねできていると評価できるが、体圧の確認はされていない。ポジショニング熟達度の高い職員は情報量が多い。表現する言葉が職員間で統一されていないため、記録内容の読解に労力を要した。

A（アセスメント）：書かれていないことが多い。「O」の後「A」がなく「I」が記載されている。ポジショニング自体の評価やマットレス、車いす等、環境との関係を分析する記述は見られない。

I（介入）：実践は丁寧に記されているが、毎回記載内容が同じになりやすい。機能訓練士との連携が可視化できている。

P（計画）：観察はできても、そこからプランにつながらない記述も散見された。

事後アンケート：「観察やアセスメントを通して、内省し意識的な関わりができた」「他職種との連携や、職員間で経過を共有することができた」等の意見があった。

記録する過程で、利用者理解とチームケアを実感することができており、ポジショニングの理解が深まっただけでなく、利用者の身体も改善が見られている。事例検討のための経過記録として生活支援記録法（F－SOAIP）を有効に活用できると考えられる。

【今後の展望】

ポジショニング教育のツールとして、生活支援記録法（F－SOAIP）を活用した①ポジショニング実践過程の記録のための教育媒体、②利用者の姿勢と生活活動の記録様式の検討に取り組む。